

# 戦災傷害者 心身の傷 今も

## 右腕切断の 豊村さん

約十万人が亡くなった東京大空襲から十日で七十六年。全国の空襲で手足を失ったり大やけどを負ったりした「戦災傷害者」は、元軍人のような補償のないまま戦後を生きてきた。今も痛みや治療を抱え、片時も戦争を忘れられない人々にとって、空襲は現在進行中の問題だ。救済法制定を求める動きが強まる中、終わらない苦しみを見つけた。

「あの日から腕のしびれが止まらない。つらい思いをして左手一本で生きてきたんです」

千葉県柏市の高齢者施設。穏やかな昼下りの玄關先で、車椅子に乗った豊村美恵子さん(九七)が空襲の後遺症を語り始めた。

一九四五年三月十日の東京大空襲で、両親と二人のきょうだい、深川の自宅を失った。悲しむ間もなく八月三日午前十時すぎ、乗っていた電車が赤羽駅で米軍機の機銃掃射を受けた。

「伏せろー」の声で身をかがめるので精いっぱい。隣にいた女性から「血が出ているわよ」と言われてわれに返ったが、指先は曲がらず、白いブラウスが赤く染まった。不思議と痛みは感じない。朦朧とした意識

の中で病院に運ばれ、医師に「手だけは切らないで」と訴えた。目覚めると、右腕は切断されていた。

終戦後も傷口がふさがらず、十二月に再手術をするなど、何度も身体にメスを入れた。失った右腕がまだあるような感覚があり、身体の不バランスを崩してよく転倒した。物を切る、洗う、運ぶ、料理をする、手をつなぐ、化粧をする…。全ての日常動作は奪われ、結婚も経験したがすぐに離婚。国鉄の外郭団体に再就職し、一人で暮らした。

現在暮らしが高齢者施設は個室で、ベッドで身体を休めて過(す)すことも多くなつた。残った右腕は血の巡りが悪く、今も身体が冷えがつきまとい眠れない。冬は特にさうだ。冷たくなっ

## 血行障害で冷えとしびれ



ていく右腕がかわいそうだとまらない。そんなときは、右腕を服の袖から抜いて胸に当て、自分の体温で冷えを和らげる。「温かくすると、冷えが少しはましになるからね」

被災後しばらくは大きな男性用の義手しかなく、夏でも長袖の服の右袖にタオルを忍ばせ、袖口をポケットに入れて歩いた。その後

切断された右腕を見せ、症状を話す豊村美恵子さん。「私たちのような人をつくらないために、訴えない」と取材に応じている=千葉県柏市で

は女性用の義手を使ったが、今は自宅に置いたまま。「着飾ることがないから。交通事故か何かで右腕をなくしたぐらいにしか思われていないかも」と笑う。

それでも考える。もし右腕があれば、好きな人と手をつなぐこともあったのだろうか。子どもを抱きしめたり頭をなでたりする日もあったのだろうか…。定年退職後、易学を学んだこともあった。「でも、どれもあまりに現実味がなくて。普通のことかしたかっただけなのに、普通さえ追いか

ら。交通事故か何かで右腕をなくしたぐらいにしか思われていないかも」と笑う。

それでも考える。もし右腕があれば、好きな人と手をつなぐこともあったのだろうか。子どもを抱きしめたり頭をなでたりする日もあったのだろうか…。定年退職後、易学を学んだこともあった。「でも、どれもあまりに現実味がなくて。普通のことかしたかっただけなのに、普通さえ追いか

## 「国は一度でもこの痛みを感じたことがあるか」

でも声を上げていたが、「国はどこまで分かっているのかな」と虚無感にもさいなまれてきた。「相手に伝わらず、跳ね返ってくる。昔の話じゃないか、まだ覆言を言っているのかと思われていたのでは」

あらためて国に望むことを尋ねると、「こう絞り出した。『こんな苦しめてつらい人生を歩むのは私だけで十分。国は一度でもこの痛みを感じたことがあるか。分かるうとしたことがあったのか』

めなくなつてあきらめていく自分がつらかった」

定年後は、国に空襲被害の補償を求める集団訴訟にも加わった。施設に入る前は救済法制定を求める「全国空襲被害者連絡協議会」

「アニメ映画『この世界の片隅に』の主人公「すずさん」は呉の空襲で右手を失う。七十六年前、同じように重いけがをした人は全国にいた。被害を受けなかった人によって復興していく社会で、取り残された人がいた。そして今も苦しむ人がいる。フィクションでなく現実の話だ。(本)

銘柄	終値	前日比
110	107.16	▲0.17
111	107.16	▲0.17
112	107.16	▲0.17
113	107.16	▲0.17
114	107.16	▲0.17
115	107.16	▲0.17
116	107.16	▲0.17
117	107.16	▲0.17
118	107.16	▲0.17
119	107.16	▲0.17
120	107.16	▲0.17
121	107.16	▲0.17
122	107.16	▲0.17
123	107.16	▲0.17
124	107.16	▲0.17
125	107.16	▲0.17
126	107.16	▲0.17
127	107.16	▲0.17
128	107.16	▲0.17
129	107.16	▲0.17
130	107.16	▲0.17
131	107.16	▲0.17
132	107.16	▲0.17
133	107.16	▲0.17
134	107.16	▲0.17
135	107.16	▲0.17
136	107.16	▲0.17
137	107.16	▲0.17
138	107.16	▲0.17
139	107.16	▲0.17
140	107.16	▲0.17
141	107.16	▲0.17
142	107.16	▲0.17
143	107.16	▲0.17
144	107.16	▲0.17
145	107.16	▲0.17
146	107.16	▲0.17
147	107.16	▲0.17
148	107.16	▲0.17
149	107.16	▲0.17
150	107.16	▲0.17

銘柄	終値	前日比
151	107.16	▲0.17
152	107.16	▲0.17
153	107.16	▲0.17
154	107.16	▲0.17
155	107.16	▲0.17
156	107.16	▲0.17
157	107.16	▲0.17
158	107.16	▲0.17
159	107.16	▲0.17
160	107.16	▲0.17
161	107.16	▲0.17
162	107.16	▲0.17
163	107.16	▲0.17
164	107.16	▲0.17
165	107.16	▲0.17
166	107.16	▲0.17
167	107.16	▲0.17
168	107.16	▲0.17
169	107.16	▲0.17
170	107.16	▲0.17
171	107.16	▲0.17
172	107.16	▲0.17
173	107.16	▲0.17
174	107.16	▲0.17
175	107.16	▲0.17
176	107.16	▲0.17
177	107.16	▲0.17
178	107.16	▲0.17
179	107.16	▲0.17
180	107.16	▲0.17

銘柄	終値	前日比
181	107.16	▲0.17
182	107.16	▲0.17
183	107.16	▲0.17
184	107.16	▲0.17
185	107.16	▲0.17
186	107.16	▲0.17
187	107.16	▲0.17
188	107.16	▲0.17
189	107.16	▲0.17
190	107.16	▲0.17
191	107.16	▲0.17
192	107.16	▲0.17
193	107.16	▲0.17
194	107.16	▲0.17
195	107.16	▲0.17
196	107.16	▲0.17
197	107.16	▲0.17
198	107.16	▲0.17
199	107.16	▲0.17
200	107.16	▲0.17

格別の配慮を」と求めた。その後、夫婦別姓への見解を尋ねられても「個人や政治家と

「二エースの追跡」

面々が要請文を出して歓心を買おうとしたように思う」

こちら特報部

被災被害者の多くは晩年も後遺症に苦しんでいる。全国被災被害者連絡会(全傷連)で事務局長を務めた岩崎建弥さんによると、元会長の杉山千佐子さん(二〇一六年に百一歳で死去)は名古屋空襲で負傷した左手の痛みが悪化し、一週間に一回ペインクリニックで痛み止めの注射を受けていた。顔などのやけどで手術を繰り返す人もいたが、身体機能に障害がないと身体障害者福祉法などの対象にもならなかった。

空襲被害者には補償なく 超党派議連が法案を準備

た人や顔にケロイドが残る人は同約二百五十万円。民間の空襲被害者に同種の補償はなく、全傷連は一九七〇年代から援護を求めたが、国は拒否した。一方で、現在、超党派の国会議員

「人間としての誇り取り戻したい」



全傷連の大会で演説する故杉山千佐子さん。名古屋空襲で左目を失い、左手に大けがをしていた。2010年、名古屋市中

連盟が、傷害者一人当たり五十万円の一時金と被害調査を柱とする救済法案を準備中だ。四九年の経済安定本部報告では約二十三万人いた空襲(原爆を除く)の重症傷者も、多くが亡くなり、救済法の対象は推定約四十六百人。岩崎さんは傷害者が救済法を求める理由を「八十、九十歳となってお金の使い道もなく、戦後の人生が戻ってくるわけでもない。金額での問題ではなく、人間として国に尊敬を認められ、誇りを取り戻したい」と思っている(一話) (橋本誠)

救済法望むのは…「大変でしたねのひと言ほしい」

「大変でしたね」と一言ほしい。戦争で亡くなった人にあの世で会った時に、一つでも良い話がしたい。それだけなんだ。救済法制定を求める空襲連が三日に東京・永田町で開いた集会には、幼稚園児の時に鹿児島県内の空襲で片足を失った安野輝子さんが、ビデオ会議システムを通じて参加した。「不自由と痛みと生きてきた。人生の最後の一瞬でも、この国に生まれて良かったという気持ちを抱きたい」と訴えた。

一九四五年六月十八日の浜松大空襲で自宅が焼夷弾の直撃を受けた木津正男さん(九八)は浜松市でも、被災被害者の一人だ。四日に現在の症状を尋ねると、「右手の中指が手のひらにつかないから、おはしでご飯を食べる時にぼろぼろこぼれる。背中の痛みは毎日湿布を貼って抑えてる」と、せきを切ったように話した。両手や背中など全身に大

やけどを負い、五月月も意識不明だった。一命を取り留めたものの、やけどで硬直した手が動くまでに三年。回復してからは電気工事業を営み、八十四歳まで働きつめた。後頭部に爆弾の破片が長年残ったまま、取り除く手術を受けるまで頭痛に悩まされた。空襲から七十年以上たった二〇一九年、右手が突然はれて倍くらいの厚さに。終戦記念日の八月十五日だ

浜松の94歳・木津さん



手記を前に浜松大空襲の記憶を話す木津正男さん(昨年7月、浜松市で)

った。一年ほど治療を続け、血。おなかの皮膚を手に移したが治らず、昨年六月に出。植する手術を八月に受け

中指不自由／爆弾破片で頭痛／皮膚がんで昨年手術

高齡のため全身麻酔を避けて臨んだが、「途中で麻酔が切れて、体にメスが入るのを感じて思わず叫び声を上げた」。はれの原因は皮膚がんだったと医者から言われた。空襲によるやけどが長時間たつてがんを引き起こしたとみられ、今も検査が続いている。一度と戦争が起きないことを願い、手のしびれにあらがいがながら体験を書き続けている。テレビから流れる国会中継で被災被害者が取り上げられることはほとんどない現状に、「俺たちのことはほっぽらかしにされている」と感じる。

Table with financial data, including columns for '銀行' (Bank), '繊維紙' (Textile Paper), and '卸売業' (Wholesale Trade). It lists various companies and their corresponding values.

Table with financial data, including columns for '銀行' (Bank), '繊維紙' (Textile Paper), and '卸売業' (Wholesale Trade). It lists various companies and their corresponding values.

宮2震けの居住話

話題の発掘